

生田直親

書下し長篇。ハニツク・ノベル

ソ連侵略 198X年 下

●北海道占領さる





TOKUMA NOVELS

発行者 荒井 修

発行所 徳間書店

東京都港区新橋四ノ一〇 郵便番号一〇五
電話四三三・六二三一 振替東京四一四四三九二

生田直親

ソ連侵略
198X
(下)

Naohika Ikuta ©1980

カバー絵／谷口 茂

デザイン／矢島高光

落丁・乱丁はおとりかえいたします

〈編集担当 本間 肇〉

83125g

生田直親

書下し長篇。パニック・ノベル

●北海道占領さる

ソ連侵略 198X年 今

TOKUMA NOVEL

86-5 C0293 ¥680E 定価680円

れんしんりやく
ソ連侵略198X年〔下〕
いくたなおちか
生田直親



と「北海道」は因縁浅からぬものがある。

ーズンに「大雪」を滑降することもあるが、青年時代の一時期を
拓に費した日々があるのは、知られざる事実だ。

の体験が息づいているのが、

さな魅力の一つとなっている。

TOKUMA NOVELS



書下し長篇。パニック・ノベル

ソ連侵略198X年〈下〉

●北海道占領さる

生田直親

間書店

TOKUMA NOVELS

目次

COMBAT

II

7

COMBAT

III

86

COMBAT

IV

160

COMBAT II

198X年8月14日 AM6時30分

北海道 釧路郡釧路村 上別保

途方もなく龐大な消耗を競いあう殺戮は、ヘリコプター群による空中戦によって幕が切つて落とされた。

現用の攻撃ヘリコプターとしては、世界でもっとも優れているといわれているAH-1Sは、ローター直径13・41メートル、全備重量4・5トンで最大速度315キロ時、実用上昇限度3819メートル、航続距離617キロという性能を持っている。乗員は2名で、武装は対戦車ミサイルTOW8発70mm空対空ロケット弾38発、3連装XM-230型30mm機関砲1基を装備している。米軍名は、ヒューイ・コブラで地上から撃たれた対空ミサイルの熱線感知をだます、特殊な塗料が前部に塗られている。

これに対しソ連空中機動旅団、アンブルの攻撃へ

リコプターMi-24ハインドDの武装は対戦車誘導弾スワッター2基、S-5・57mmロケット弾32発、機首の12・7mm機銃とその直下に20mm機関砲を持っている。

AH-1Sが20機なのに対し、ハインドDは50機、倍以上の敵機に向かってどう闘い、どう叩くか。

「全機、発進」

20機編隊を束ねる斉村啓明二尉が、連絡マイクにそう叫ぶと、操縦桿をぐっとおさえて急下降させた。

「つつこむぞ城所、いいか」

と前席の城所一士に言った。

「諒解」

城所一士の張りつめた声かはね返ってくる。城所一士の手は機首の下に旋回砲塔にある機関砲の回転ハンドルを握り、左右の短翼の下に抱えこんだ蜂の巣状の円筒ポッドに、19発ずつ格納されているミサイルをいつでも発射できるよう、発射ボタンに指先をのせていた。

斉村機を先頭に、20機のAH-1Sは急下降しながら前進し、地面すれすれをかすめる匍匐飛行で西進してくる敵機甲部隊に接近してゆく。

ハインドD群もこれ wait していたかのよう50機が横に展開し、こつちを迎え撃つ形で降下接近する。双方が激突するかのように高速で距離を縮めるとき、これは、どちらが衝突の危機に長く耐えられるかの我慢くらべのようなものだった。先にこらえきれなくなつたほうが、空対空ミサイルを撃ち、急上昇して空中衝突を躲^{かく}そうとする。

機首に席を占める城所一士の両眼が、とびださんばかりにかつと見ひらかれている。その眼が、真一文字に接近し、視界に急速に膨れあがるハインドDの姿を食いつかんばかりに捉えている。後部で一段高くなつた操縦席の斉村二尉からは、まだ発射命令がない。

このままでは、相手に先に発射され、ともにミサイルをぶちこまれる、と思つた瞬間、機は急激に高度をさげた。

頭上を、ハインドDの胴体兩脇からとびだした2個のミサイルが白い煙りの尾を曳いて擦過してゆき、ハインドDはローター音もけたたましく急上昇してゆく。斉村二尉もただちに操縦桿をめいっばい手前に引きながら左に倒した。AH-1Sは左に急旋回しながら急上昇する。機体がきわめて細く、可能なかぎり高速

化したこのヘリは、旋回、上昇に要する時間が、重裝備タイプのハインドDに較べ、比較にならぬほど早く、敏捷に180度の旋回を終えていた。

斉村機が完全に向きを変え終つたとき、すれ違つて急上昇したハインドDは、まだ、時計で4時の方向に機首を立て直しかけていた。

「いまだ」

と斉村は叫んだ。「撃つー」

射手席の城所の指が、ミサイルのボタンを押した。左右の短翼下の円筒型ポッドから、細長く、尾部に安定翼を持つロケット弾が発射され、白い推進火薬の尾を曳いた2条の航跡は、みるみるうちに射程を伸ばし、前方のハインドDの胴体に吸いこまれていった。

ぐわつと大氣を揺すぶる衝撃で、ハインドDは焰に包まれた。

斉村機は、その焰の上を通過する。

「10時の方向に、敵機」

と眼ざとく城所が、ななめ上空からつっこんでくる別のハインドD2機を発見した。斉村はぐんぐんと機を急上昇させながら西進して、上別保^{かべほ}三叉路上空へと、2機の敵をいざなつた。

その付近一帯には、根室本線の別保トンネル内部に身を隠す第5師団戦闘指揮所をはじめ、第4普通科連隊や第5特科連隊が、ソ連機甲部隊の射程内への接近を、息をひそめて待ち構えているのだ。

斉村機はオビラシケ川上空で高度を約100メートルにあげ、大きく右に旋回した。追撃のハインドD2機も、速度をあげて、これを追いかけて、ミサイルの餌食にしようとする。だが、オビラシケ川の窪地には、高射2個中隊がひそんでいたのである。

第2中隊の3門の35mm2連装高射機関砲L90が火を吹いた。

この新しい火砲は、べらぼうに長い双連の砲身から35mmの焼夷榴弾を、1火器から毎分550発、双連で1100発を発射する能力を持っているが、同時にスーパーフレードーマウスと呼ばれる、レーダーと計算機からなる射撃統制装置と連動していて、飛行物体をレーダーが捕捉すると、コンピュータが未来距離を弾きだし、その数値に従った砲身の照準点と俯仰角度を射撃手に示し、自動送弾をするという特性を持っている。

レーダーが、斉村機を追続する2機のハインドDを

捕捉した。コンピュータが示す、照準点と俯仰角度へと、長い砲身が旋回してゆく。5秒間、砲口が火を吹いた。ちよつと休んで、また5秒、砲口が火煙を吐いた。

それだけで、2機のハインドDは、それぞれ約10発の35mm焼夷榴弾をともに食らい、火だるまとなって釧路湿原のほうへと舞い落ちていった。

「よし、T62を叩くぞ」

と斉村二尉は、城所一士に呼びかけた。斉村は機首を東に向け、44号線、根釧国道上を、路面を舐めるような超低空でつこんで行った。上空ではAH-1SとハインドDが入り乱れて飛び交い、互いにミサイルを撃ち、あるいは機関砲を乱射しあっていた。AH-1Sは、敏捷な行動で、よくハインドDを餌食にしているようだったが、ハインドDも数にモノを言わせてAH-1Sを追いつめて火を吹かせているようだった。その空中戦の間隙を縫うように斉村機は西進して行く。ソ連機甲部隊に近づいてゆく。三叉路から深山、157メートル三角点をすぎると、前方にT62戦車群の砲身にせき立てられるように歩いてくる避難民の、人と車の長い列が見てとれた。

この辺りの地名をルクシュポールとアイヌ語で呼ぶ。齊村は、一旦機を南に旋回させ、海岸線近くまで南下してから、反転北上してT62を側面から叩こうとした。

T62戦車は、1965年5月、モスクワで行われた対独戦勝20周年記念パレードに初めてその姿を見せたソ連の現用主力戦車である。ソ連は既に、さらに新しいT72を登場させてはいるものの、T62はなおソ連軍とワルシャワ条約諸国陸軍の中心として健在であり、当分は第一線装備にとどまるものと予想されていた。

戦闘重量40トンで乗員4名だが、その特徴はなんといっても主砲であるU5-TS(2A20)滑腔砲にある。西側諸国の主力戦車の大半が105mmのライフル砲身であるのに比べ、常識破りの滑腔砲を用い、その口径がなんと115mmという大口径なのである。

ライフルは砲身の内側に刻まれた旋条痕のことであって、細長い弾丸が砲身をとびだすとき、この旋条痕によって弾丸が回動旋動を与えられ、これによって弾道の安定、直進性が導きだされるのである。近代的滑腔砲は弾丸に矢羽のようなフィンをつける翼安定方式がとられ、装弾筒付翼安定徹甲弾(APDFS)を

使用することによって、通常の装弾筒付徹甲弾(APDS)に比べ、有効射程が5パーセント前後増大するうえ、貫徹力では1・7倍に達する利点があった。

ただ、弾丸の飛翔中に強風などの外乱を受けやすいから、命中精度にマイナス要因がでるのではと懸念されていた。

ともあれT62はこうした大口径砲を乗せているにもかかわらず、最高速度50キロ時、行動距離が路上で450キロ、路外で320キロ、登坂能力30度、超壕能力2・85メートル、装甲防護は車体前面100mm、主砲防楯170mmのデーターを誇っていた。

T62戦車群は、路面を装甲歩兵戦闘車BMP-1にゆずり、国道の両側の草原を縦一列につらなって前進していた。

齊村機は、草原の草をローターの風でなびかせながら超低空でぐんぐんとT62戦車群に接近してゆく。射手の城所一士の指は、対戦車ミサイルTWOの発射釦に触れていた。

全長46センチ、直径15・2センチ、最大射程3000メートル、秒速190メートルで飛翔する一発250万円の戦車殺しのこのミサイルは3・6キロの弾

頭で50センチの侵徹量を持っている。

城所一士は目視線指令誘導の眼鏡の中に、餌食とする敵T62の横っ腹を捉えた。

「捕捉！」と城所が叫んだ。

距離1000から900、800と、機は秒速83メートルのフルスピードで接近してゆく。

「発射用意」と斉村が怒鳴る。

こっちの接近に気づいたT62戦車群の機銃があちこちで火を吹く。その銃弾の雨の中を700、600と直進し、500メートルの距離に達した。「撃つ！」

ミサイルTWOが飛びだした。秒速190メートルのTWOが500メートルの距離を飛ぶ2・5秒のあいだ、機はなお直進して、城所の覗くスコープの視野に目標の戦車を捉えていなくてはならない。

発射して、すぐ反転離脱したい操縦者の心理にとって、この2・5秒はじつに長い、長い時間なのだった。

死生の境いを紙一重の差でつきぬけようとするとき、脳裏を掠めるものは崇高なる使命感でもなく、肉親への甘い情意でもなく、彼自身の性的願望の一端なのであった。死への恐怖が、生を産みだす生殖行為を幻想させるのか。

斉村啓明はまだ独身だった。

性格的に口の重いせいもあるが、自衛官という職業上のコンプレックスもあって、若い娘に気軽に声かけられない。従って、恋人と呼ぶべき女性もいなければ、見合いできまった相手も持っていない。

趣味は映画で、もっぱら洋画を観るように公言していたが、彼が通いつめているのは実をいうとポルノ映画だった。それも洋モノは外人女優の肌の汚なさから敬遠気味で、N映画、T映画のような国産ポルノが好みだった。なかならずN映画の加瀬みずずという女優にうちこんでいる。

加瀬みずずは、とりたてて美人というほどではないが、ふっくらした表情や愛くるしい眼許、口許に自然な愛嬌があって、そのおとなしやかな佇まいが内気な男に相応しい感じを与えている。おとなしやかな娘が、突然、胸も下半身もあらわにして、男の玩具にされる芝居をするところが衝撃的であり、ひどく性感をかりたてられるのである。

斉村は、加瀬みずずの主演する映画がかかるのを待ちかねて観に行った。しかし、札幌の町では、いかがわしい映画を観に入るところを上司に見咎められる惧

れがあったし、客席で部下と顔をあわす危険すらあった。彼は汽車に乗ってわざわざ小樽へ行つて、映画館の前を二度三度往復して、付近に知った顔がいらないのを見定めてから切符売場に近づくのが常だった。

ポルノ映画を観る程度のことには、それほど周囲の眼を気にしなくてもいいではないかと、彼自身も考えてはいる。だが、その程度の発散の仕方しか知らないのかと、上司に蔑笑されるのは耐え難い。部下に知られたら、幹部としての威厳をそこない、しめしがつかないと古風に考える。内気なだけに、プライドが強いのである。

2・5秒の、脅怖でもみくちやにされる長い、長い時間、齊村二尉は常に胸の中に思ひ暖めている加瀬みすずを、荒々しく押しひしぐ光景を想い描いていた。

常々彼は、彼にとってかけ替えのない大事な存在を、壊れものを扱うように大切に扱い、優しく服を脱がせ、眩しいまでの裸身を静かにいつくしむことを夢想していた。だが、目の前の死をないませにするためには、その大切な存在をめちゃめちゃに叩き壊すような作業を考える必要があった。

加瀬みすずは、彼の手によって身にまとうすべての

衣類を剥ぎとられ、仰向けにされた挙句、彼の手で下肢を大きく左右に開かされて、羞恥に泣き叫んでいる。彼は、眼下にひらかれた、あられもない光景にたじろぎながらも、必死に加瀬みすずの深奥の部分に眼を吸わせて、みずからを昂らそうとしている。彼はその深い部分に、自分の指を荒々しく埋めてみる。その部分の内側は、あざやかな珊瑚色を示して捻転し、彼の指を啜えこむ。指を乱暴に動かすと、悲鳴をあげる唇のように、形を歪めて痛みを訴える。加瀬みすずは、髪をうちふって許しを乞うている。形のいい弾力に富んだ胸を激しく揺すぶって、屈辱から逃れようとしている。それでも彼の指は彼女の湿潤な部分からぬけようとせず、さらに深いところを尋ねてまさぐりつつける。

これほどまでにしても彼は、昂ぶらない自分をもてあましていた。2・5秒の長い、長い脅怖をねじふせる欲情はいふりだすことができなかった。

2・5秒のあいだに機は200メートルを直進し、彼は300メートル前方に、硝煙とともに砲塔のはじけ飛ぶT62の終焉の姿を見た。同時に操縦桿を力いっぱい手前にひいて急速に反転した。

だがそのとき斉村は、頭上から急降下してきたハンドDの胴体脇からとびだした2発のミサイルが、白い航跡の尾を曳いて、真一文字にこっちに接近するのをその眼に見た。

彼がこの世の最後に見たのは、機を一気に反転するため大きく機体を傾けた一瞬に眼をとらえた太平洋の広がりであった。波頭に陽光を反射させる無数の眩しいきらめきが、海のおしやべりのように愛らしげに映った。

次の瞬間、斉村機は爆発的火焰をあげてローターを四散させ、根釧原野の一端に舞い落ちていった。

ヘリコプター群の交戦と時を同じくして、67式30型ロケット弾発射機が連続的にロケット弾を撃ち始めていた。

発射機は大型4トントラックの背中に2本ずつ載せられていて発射時には弾頭部を押しあげ、高射角に撃ちだす。このトラック6台で1個射撃中隊を編成し、各師団の特科大隊についている。

6台で一斉に6発の発射が可能で、3秒後にはさらに6発を後続発射できる能力を持っていた。有効射程

が2万8000メートルもあって、全長4・5メートル直径337mm、重量573キロもある弾頭の破壊力は20りゅうの榴弾頭の数倍もあるといわれている。第一線師団規模の展開縦深のすべてを制圧するに足る射程を持ち、敵の対砲レーダーに捕捉される危険性があれば、ただちに発射地点を移動させる自走性をもっているし、操作兵員1台にわずかに4名という省力化に成功しているのである。

こうした砲撃は、すべて根室本線の^{（トンネル）}隧道入口の第5特科連隊本部の指揮官の指令にもとづいて行われていた。指揮官は隧道内に乗りいれた2・5トントラックに搭載した70式野戦特科射撃指揮装置を前にして指揮をとる。この装置は、計算器、制御器、情報装定器、タイプライター、読取器、さん孔器等からなっていて、前進観測者が携行している70式レーザー測遠機が測距した目標までの距離、70式初速測定機が捉えた10りゅう、15りゅう、30型ロケット弾などの弾丸の初速数値、さらに75式自走地上風測定装置が測定した縦風、横風の風速データ等を記憶させることによって、氣象計算、測量計算、そして各種射撃計算値を各特科中隊に送りこむ仕組みであった。

第5特科連隊長の山科一佐は、前進観測兵からの着弾報告に耳を傾けながら、ただちに修正値を読みあげ、射撃指揮装置を操作する兵がその数字を機械にたたみこむ。

後方の長距離砲の発射音と、前方の着弾音とに挟まれながら、ここには殺気だったむきだしの戦場の雰囲気はない。射撃の直接的指揮をしているのはこの場合機械であって、殺戮の意志はすべて機械に付与されている。人間は冷静に機械の操作をしているだけだった。それはテレビスタジオの副調整室で番組を進行させているテレビマンたちによく似ていた。テレビディレクターの合図で、T・Dがカメラを切りかえ、ミクサーが音響調整をしたり音楽を流したりしている。そのほかにV・Eとか、L・Dとか、サブ・コンの人々が番組を作っているのは事実でありながら、彼らは完成された映像作品にはチラとも顔をださない。射撃指揮装置を操作する山科一佐以下の人々も同様に、各種火砲に指示を与え、砲撃をさせ、その一撃で戦車をうち壊し、装甲車をこっぱみじんに、何十何百人の生命を吹き飛ばしながら、なんらの心痛みを感じることがなかった。それは機械が命じている殺戮であ

り、いま1万メーターの彼方で行われている大量殺人行為は、彼ら指揮スタッフが作りだした作品と呼ぶべき客観性を持っていたからだった。

折からルクシュポールにさしかかっていたソ連機甲部隊は、最初のロケットの一撃が、けしかけるように前を歩かせている避難民の中に着弾し、100人以上の人間が宙空高くはねあげられるのを見ると、縦列で進んできた戦車群と装甲車群をあわただしく横に展開させた。展開を終るまでに、3台の戦車と5台の装甲車が直撃をうけて焰えあがっていた。

T62戦車約50輛が、射程内に突入しようとフルスピードで走りだす。装甲車BMP約100輛もこれにつづく。これらの履帯の音がごうごうと草原の空気を慄わせて、ようやく殺戮のむごたらしさを示し始めているた。

BMPは装甲車というものの、そのボデーはPT76水陸両用戦車である。主砲に口径73mmの滑腔砲を持ち、フィン安定式の成型炸薬弾を発射し、その有効射程は1300メートル。主砲と同軸に7・62mmPKT機関銃を備えていた。

これに加え主砲の砲身上に、西側識別名で、サガー、

と呼ばれる有線誘導対戦車ミサイルの発射機があり、この射程は3000メートル。また近距離の対戦車戦闘用として、RPG-7対戦車擲弾発射筒、対空防御用にはSA-7、グレイル、地对空ミサイルが、それぞれ車内に搭載されている。つまりBMPは、戦車、歩兵、航空機に対して独立して戦闘が行える装甲車なのである。

乗員3名、兵8名を乗せて行動するが、操縦士が最前席を占め、その後ろに車長、砲塔は砲手1名で操作される。後部兵員室には8人の兵が左右4人ずつ、背中あわせに坐って、側面の左右に4個ずつ穿たれた銃眼から7・62mm PKM機関銃や、5・4mmのAKS-74ライフルを突きだし、上部についている潜望鏡で目標を捉えて射撃する仕組みになっていた。

接地圧1平方メートル当たり0・57キロという機動性と、路上最大速度65キロ時という敏捷性を発揮して、T62戦車のうしろを負けじと追ってゆく。そのあとを140mm多連装ロケット・ランチャーや野戦ミサイル・ランチャー、自走152mm榴弾砲がつづき、最後をBT60装甲兵員輸送車が1台に14名の兵を乗せ、50輛の群をなして追っていた。

これが第1梯団であり、すぐ後方を、やはり避難民をせき立てるようにした、同規模、同兵力の第2梯団がやってくる。第2梯団も被弾を恐れて縦列から横への展開を始め、こうなると避難民は右往左往して機甲部隊の履帯や車輪に蹴散らされ、悲鳴をあげて逃げまどう。その頭上に、つきつきと榴弾が降り注ぎ、苛烈な爆発に吹きとばされたり、破片を浴びて血まみれになって倒れてゆく。

草原に、子を呼ぶ母の声の流れ、夫を求める妻の声、父を捜す子の声が交錯する。その叫び声も、生ぐさい血の匂いも、榴弾の炸裂する爆風がひっそらってゆく。

157メートル三角点付近まで進出していた第1戦車中隊の74式戦車12輛は、3輛の40mm自走高射機関砲M42を随伴して、上空から対戦車ミサイル・スワッターを撃ちこもうと乱舞する10機のハインドDの攻撃を躲しながらか、敵T62戦車との遭遇を待ち構えていた。上空に既に、わがAH-1Sの姿はなく、生き残った約20機のハインドDは二手に分れ、10機が30型ロケット弾発射機の発射陣地にミサイル攻撃をかけ、残る10機が戦車中隊を急襲しているのだった。